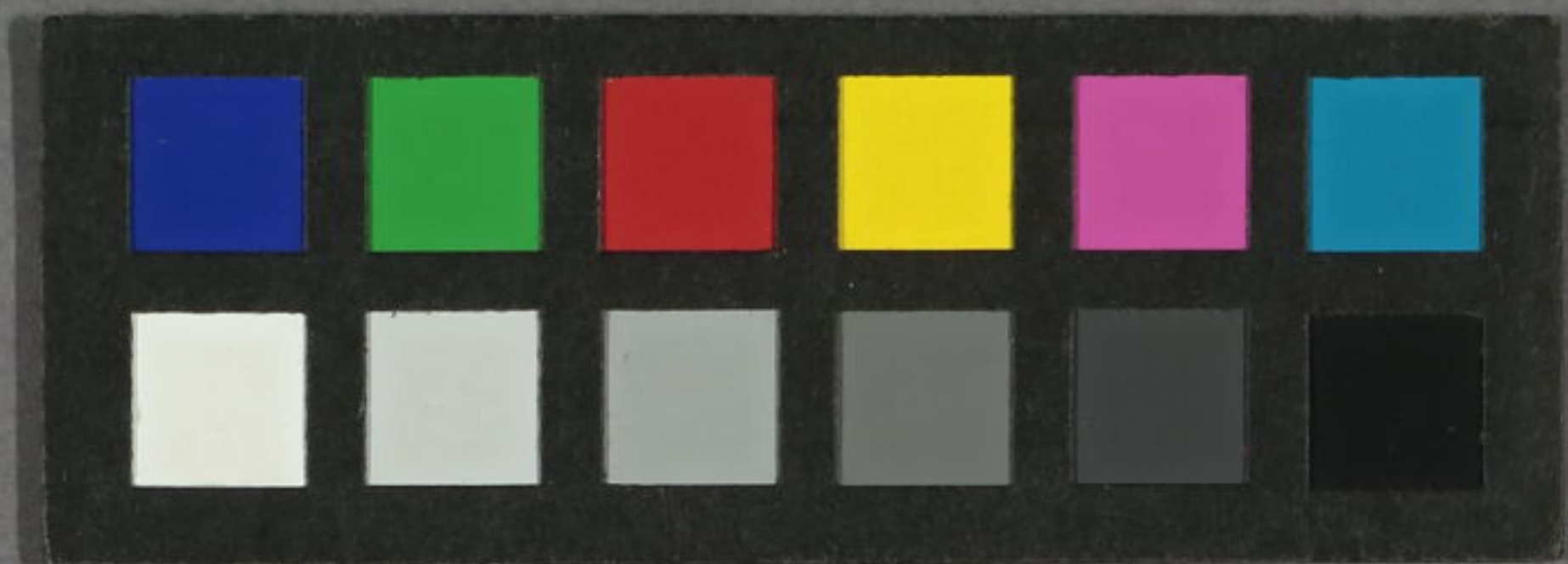




排

手

挑

燈

坤





あまの

負亀

おろの

えん



あまの

負亀



橋治画



四季

貞富

春は藤相の家を尋ねて
 娘とて一軒涼を
 常盤木とてまゐる言ひ
 かきも此のまゝの松
 三物
 夏は山、薔小紅葉
 月のある夕暮、秋は
 山を小舟にまゐる夕暮
 文佐



手紙丁下

素

雲雀

負宜

裾野乃

之

今



後句切字の事

サヤゾウヨウリありあり
さぞありありこそふふ
いふふふふふふふふ
ゆらめらんらんせん
あまいふいふふふふ
かたきふふふふふふ
早ぬむふふふふふ
現るふふふふふふ
白くふふふふふふ

二字切

三字切

おこふふふふふふ
いふふふ何ふ事なり星の中

女帶男乃衣裳之冠也

糸糸々々 冥法 乃 是 眼鏡

喜々々有(五)の(五)に

意田一雷と隙と法法ん

此切字ナク切字自當

師傳をくはす處に

切字 あきり合

ふのぬ
ぬのぬ
ぬのぬ
ぬのぬ
ぬのぬ
ぬのぬ

相如方舞如可如也

此部ハ、切字ニ有リト

五

我乃神

當代のるにひうき男り 貞雨

めさくも本奥の河を考案し芳雨

まゝに扇の古も異さ
一米沢
鱗

長崎、唐、船の落着き、全

乞食邑曰陰（西）異（山）其山

白糸流も跡乃異之全 藤里

富士毛澤其木

酒如追々西野堂
東山

為子葉音如也
有津和野
雨
芦雲

湯治層層くものおの路に^全萬國
雲ふ八海の底とをきき^女娛流
子と母の園をまて是の海に^女出
隠居へは事城の落き^女巴山
奥舟の行帆照りまわし^女可邑
水際へ一寸さるの掛可^女耕風
陸へ二ふ三ふ^{富水改}掛^女鳥山
是日の山さき^女の横に^女風光
人のおの^女と母を^女おの^女踊に^女掌卷
目振る^女松を^女おの^女庭に^女伴水

年あ^女の肩も^女あ^女き^女紙子^{小池氏}
お玉せ^女り^女に^女中へ^女お^女き^女か^女風車
縁^女お^女き^女に^女お^女き^女と^女牡丹^女に^女芳角
鬼百合^女を^女お^女き^女の^女海に^女翠路
大なる^女目^女も^女お^女き^女入^女に^女百様
お^女き^女に^女お^女き^女の^女破蓮舟
一^女お^女き^女に^女お^女き^女の^女掛^女に^女秋空^{木山舎}
お^女き^女に^女お^女き^女の^女日^女に^女錦秋^女
大なる^女農具^女の^女お^女き^女の^女掛^女に^女御庭
日向^女清舟^女の^女お^女き^女の^女お^女き^女に^女泗浪

多川と今頃には人々も鹿川延山

全

蘇好尔家、主似も暑川釣浦

上州七日市

二三流へ碎るる水より更幽

全小幡

一群の菊にわりの時より九阜

全

峰の梅枝丹色の有藤川杉雪

全前橋

新しむを流す川に流るる扇風

全

凡そく目ふも流るるの流るる松露

全芝

落葉にけり葉を埋む深山

全伊勢寄

淋と、寂又濃るる水より専秀

全

料と急度なり男界川

全波川

麻猫の耳もは蝶去眠り

全伊香保

色く赤きと喚るる也野川

全高寄

和衣川鳴乃川へ春を流す

全

志る菊の影は流るる水より亭松

全

和衣川鳴乃川へ春を流す柳川

全

和衣川鳴乃川へ春を流す山堂

武蔵水竹

板川の曲と形月樹可南山色

全安戸

おと火神尋びておと救き川

八幡山

おと火神尋びておと救き川好竹

全

暖うく蓮乃葉葉枝り全原月

以東結海へかりて清水川新宿町芳月

白雲半分ふあふ流可那曉山全喜水改

高き飛風ふきあはれ橋全蘭思

四五貫うきり四ふりふり全柳糸

吸筒月煙をきき好む瓢上手邑う系泉志

井も流のうき曇は九良四間了管竹

迷子は表ふり叱り葉葉全

何あゆむ朝も雪乃金り長根一桐

入桐木ゆきけりし時黒熊いし全霍昌

肉くふ廊の動く登麻宇貫川龍

涼し陸乃舟へ腰全はる可水

まきざういゝ表はれ時上小橋村合山笑

舞の将も好む雪日野印地り全芦元

今童も情冷休むる野上松山

むすむすて而る者の目の橋矢田は全芦睡

潮漲るうきあはれ橋吉井は全松甫

一葉に紅葉橋乃野分全は全岸松

顔撫く懐へ入るる葉全は全松川

次度月入目ききれり全は全保水

一、新洲のこゝれや水注ぎ全 桐直
雲霞の井に曲り芳汁全 孤遊
陽を色染う煙上大塚 濡佛珊木
糸母也秋の幸乃聞所八幡山 船ト
新島也秋の目く注款全 文竹
一八や二八月ま家むす全 竹槌
おゝうと幕結たなと横川吉井 松且
新島本町筋の小次郎全 古之
雪や藤花のへそ戸の槐全 笠雨
夕暮力高き月斗入尻全

新立ふちの流るや草同保邑 扇山
雪うぬふち横揺れ渡り鳥小林邑 文里
古くは日神やあゝの巻子勇新宿甲
雪や雪うと春の鰯横壁 松雨
名月や尾花の藤も是ふ鳥小串 文哥
五秋や木こし物の糸支度長根 文賀
梅うきや隣うと来るやの庭馬庭 閑山
清みは庭やこゝれ注の音岩井 琴山
情も雪女は碑や百合の巻洲柳全
七夕や風と庭にけし無乃香悦山西平井

石月や沖ふちには流す小艇全 芦荻

新く乃梅の白くも磨ゆ倉加野 牛雞

梅咲や子多のおくさく全 文皇

重柳や有しに香る瓜の果伊勢寄 彩柿

惣飲り後こもる也家の梅全 花隣

と食の果や新水のきりく前橋 池鯉鮒

烟前や木の葉も舟の鳴る戸全 盛賀

流石も筆目やゆき花の雪全 市寶

傘の寒くや折ふ草うら小幡 透竹

心るじきもも花や根拔き魯州

石月や相根の満ちけい全 芦葉

草花も似合ぬ底後の縁全 芳州

蒲公や沢邊にはきり水全 永州

夕影もあさきさき此る人全 齋州

隙さうも葉ふわや秋の雨全 東州

松や戸柳法園月昼の光全 羊州

兼柳や子多のきり詩百篇全 客應

舞柳や恵さきかた松の枝全 父子

春のひや彫けりて冬月長野原 成芦魚

源一きり松も枝の枝悉行田 斗醉

煙尚う橋の顔向也かきほくし全四寺 芦鴨

始妻の思ひ所也峰乃松永竹 山螢

散々也固全も清所と深く出竹本 山童

白くたの波世うろや八文字上総金田里 新石

まじりも持も寄る女良花近山江戸初

蕨やう流矢の通る細小政里越後大野田 風

夕まやまほりも寄る小和の食素元石州津和野

初嫁也世も持も寄る落渡全 芦洲

ふと高や日毎への疎か立全 羨鳥

戦くに水の上流也軒らる其國上州高野

お傘の雨あめや下屋鋪後文野止 王原

あけ乃る懸る月也手桃灯日峰上郡

月也日也ほろ交短の夜の白翁南部森岡

入相所のあて今もあつて三聲

句ひ深き者やいんふさう十代見改 若舟

群るも深き者やいんふさう串崎氏 虎山

新月やまひの月人月友里金三洞

森もむい、夜乃力や杜鵑万壺活月舎

初方やまきて遠めう今相友之

素石

三勝口署のちひ二日月其潮
宵や何様と云小壺 吏山
細意下故と、ひりきく千翠
之解法はあまの初内面 富旭
又き陽月も及雪蹴の音 渡牛
ひも磯池の落葉也故の物 連牛
細雪の大門口もあまの里 貞陸
之拙心やまゝの乃落如 荻玉
七夕の糸月繫也猶じうき 里鶴
おしは蚊帳のあまの杜鵑 倫路

わうの雨也雛と云興座鋪 蒼柳
初聲乃暖也いつもは証鼓 龍子
玉娃の余情月もあまの 猶 傑之
碧塗示も縁はなまの系 梓 院雨
取也く聖乃者也去廊下 二調
川流也周有乃友も青 鳩
雨の日也鴉も白紙 幟等 交鬼
胡糸乃九寸也あまの 風車
振袖も描も粗小の土 用今 其月
細るや冬もあまの 蜀 魂 其桃

心よに地の海やこぞ一舟花水
岸やへる命もあまの杜平
よに揺る燈やうの夏米南
源もあへる子居るは秋の 貞雨
ふと格とつかし

文斜の香をい海一舟々々 高寄 秀木
むかし馬のせに山橋 全 平湖
夕暮とすく名は今年菊 全 藤巴
東雲は花波は他一杜亭一之 藤岡
むしく馬屋も白くまはむ 全 竹志

松新もあらうと雲一枝の色 半貴 艶山
大源一嵐乃通ふ枕も 吉井 望雨
川端乃と路は 和氣 小幡 重友
水車 堀河 竹雨
水く新石切ふ 桔槔 安戸 東里
胡舞の影も源一 水 難歌
きりあはるが 義の 活計堂 渙友之
風りいふ高 三橋 長野原 芦奥
もろ
そよ風もあはるの言に 伊勢 芳雪

よー

欄子に布きやせは後の月吉井松庭

玉味等の本音と云ふは郭公橋軍

登つゝさうめりモト高崎好栄

おろりもり

鎌倉の名目に果かり亀深沢松岸

物おし国お恨はねるなり吉井舎牛

を因て麻のやもかりき三宅并々

さう

新田ふ久と付きまうん藤岡吉井湖雲

け舟乃帆ハ渡ふなり吉井横霞復兒

何き

尻声ハさきりわつたしん桃井氏玄壇養

けあもさきりわつたしん藤岡万垂

一片の雲おある夕々鳥河州扇志

驚すえくきもあも草三夜嵐睡

あき

やうとえ入るなりとて山藤岡山稔

道法ハゆふに雲金法音和周

源一の欲う熱の池の隅 吉井 松月

そり

元ふす南より居り秋乃多湖青 高寄

ふや

星合の女書や橋の字習合 朱天

いこ

未はいつと縁連の衣はれ秀竹 八幡山

や

次へ来る木の葉は河原の面や 吉井 松石

ふね字

葉と向んは月越後の梅は 小幡 秋空

葉は葉とわもつん望の月 宮崎 幸成

あ

ゆくとすも果は世と源松素牛 小幡

玉とこと又川原は平草河月 高サキ

川

有るは葉は是南草の胡 伊勢 芳耕

和気と見は川路は和気 全 有隣

柏の巻は 山 夜時雨原翠

香顔乃埤法 高サキ 一 呼雪

菱並と舟志 深沢 里鶴

一月のちうき川を燈籠立昇笠考

ズ

晴むふひはるる南八幡山東宇

懸流ゆめをて次子海乙山

う

己う身と海りて鳴るを延山

流るる春且伊勢

二の夜に相とみ神々群公伊勢繁耕

♪

眩るるがじりやる春の山高サキ 八千春貴

る離るる来ふあふ秋乃者而醒

今迄の瀬城馳る庫るる神壽保

へ

結風乃るあり物と種ゆへ西當屋

情正はるるをすく女郎花牛羅

平ぬ

星来ぬと月更遠ふ古小袖延山

源平も如睡とるる立甲黒熊竹倭

下知

舞も舞へ鳴入乃後の切伐柯朱沢

若神入送れ橋尔風の神小幡其朝

切字なりふ小なき句

風津合の水も 社より負雨

際昌、菊も都も九重 大野原 赤魚

あやま、やうやう 前橋 下適改

炭竈乃より 秩父 初豊東

紙漉 全 志所 云々 糸に糸 竹支

糸物 馬庭 糸物 云々 斗 紀 文 紀

後 熊谷 乃 熊谷 宿 熊谷 雨里水

あやま 山至 乃 山至 清 山至 暮 山至 山至

春 藤岡 の 藤岡 名 藤岡 と 藤岡 ま 藤岡 じ 藤岡 や 藤岡 和 藤岡 内 藤岡 角 藤岡 負宿

今 今 の 今 一 今 嵐 今 雪 今 冬 今

産 産 多 産 湯 産 予 産 ハ 産 玉 産 砂 産 と 産 云 産

一 一 内 一 其 一 角 一 う 一 も 一 些 一 云 一

一 一 く 一 蒲 一 固 一 じ 一 う 一 け 一

産 産 秋 産 と 産 凄 産 一 産 に 産

酬 酬 和 酬 乃 酬 嬌 酬 う 酬 ハ 酬

跡 跡 市 跡 一 跡 火 跡 煙 跡 子 跡

産 産 も 産

夢中菴
笠翁

万物の道りうすふこやの
 系はき源や事なり
 ことごとく入るふくを惜む

蓬萊や入る 貞橋

うらぬ柿の核

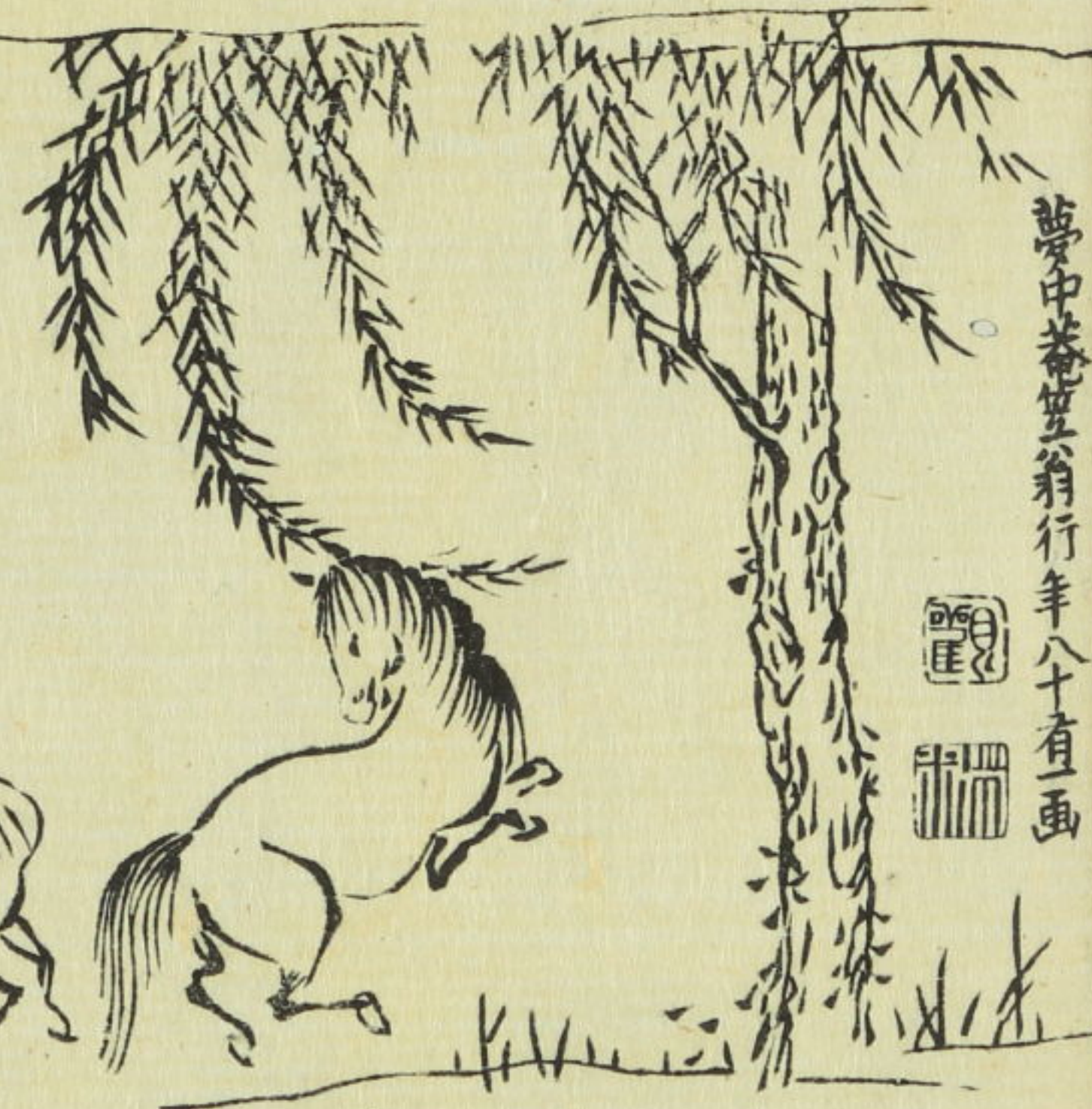
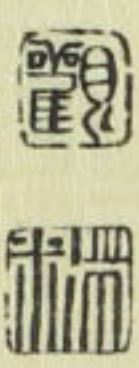
已とふくむもの無
 意をけしめんと
 りふくを

是 全

猫子の

すま 全
 新
 嘘の免

夢中菴笠翁行年八十有画



吹れて
 けさるはる

柿か

上良き崎
 好和

月一

ゆる
上る

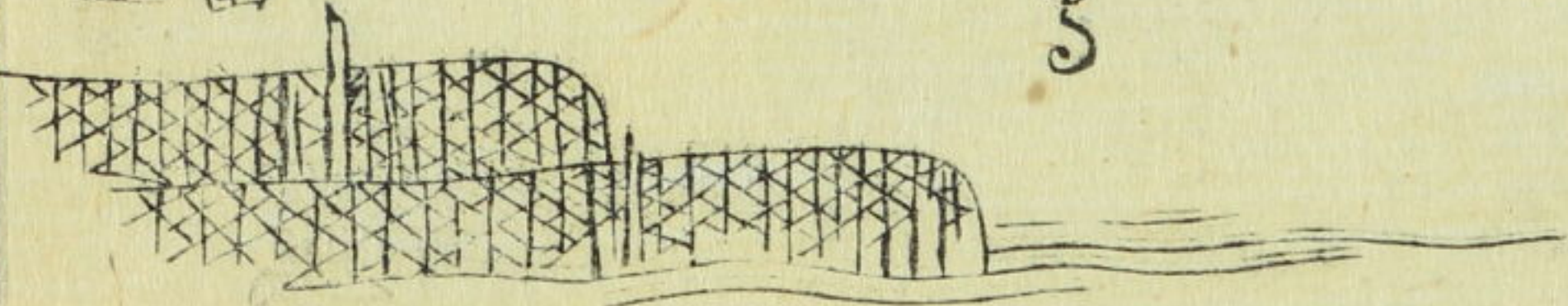
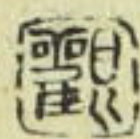


上瓦岩井

松島

夕千鳥

卯觀子望翁行年八十有二



陽春月

竹

あそび

あそび

辰の吉

山舎

湖舩



卯觀子
望翁筆

子飛町

松と鶴

松鶴

雪の降る

梅の咲く



元菜豆

四季

佐野 桃源齋

船の灯る声や月 杜川

一掬ひ月もよめる 法水

後法慈明に血あやめぬ

うさぎ松の油は夜の雪

全

こころをいそしめたる 春一徳

推のま緒をひき 延

風はいそぎ腐の匂ふ 秋吉

大空火ふくまふ 火燧

全

忍路や萬葉集の素暗許山 異周
樟史の傍やと雲理の給哉
其原也 畔はまもく月冬雪
舞ふさくら木柱と雪峰

全

石燈籠の土やうり料に 貞笠
一はく 暖法新に夕影に
峰の雪ふく別もえお景に
舞峰の影に 嘘にく内面

全

子に女に跡へいひし沙行に 貞國
子に抱く人の静也 門青也
似る事いふたて後の月
庭余も役者も一人為素子

全

おはなをさふ 雪に松の横 石之
おと春に河を志知をと機
袖裏に花をさくら木あり
秋の夕暮といふ千鳥に

全

日ぬ蛤眠新沙予燈南 芳色
燈子あやうのあやうさ
あふさむかしむさう番椒
張さく障もさるる筑

全

あふさくもさるる龜を予燈 若簾
帷子あやう織るやまそ
日ささるるさるる月
年の暮自由日さふ金満流

全

上州編四

伊勢中七十五番飾井 貞川
編編あやうく西風古社
親持人居るもさるる女郎
近分法淋にさるる霜柱

全

山の霞あさるる 心機 貞座
霧也月様あさるる 卷
一は文の好あさるる
乃遠ふ女あさるる 林野

全

雲西柏をる、風乃青、自隣
園中、杜鵑、泣く、杜鵑
秋の暮き、思ひ、色、森、見、も
是、り、や、ハ、あ、この、内、角、ハ

全

秋、操、也、一、種、移、り、う、か、れ、序、白、所
吉原、ハ、あ、り、淋、れ、源、す、非
こ、う、う、の、不、孝、恥、一、玉、原
ど、こ、も、也、居、り、あ、り、河、原

上州小幡

全

全下九場

川、者、八、割、す、地、り、花、の、山、周、賀
義、兵、衛、振、神、と、ら、り、田、村、唄
編、み、ま、の、さ、い、と、思、き、り、ち、神、ハ
以、予、と、毎、て、い、ら、ぬ、り、一、瀬

全

川、春、賀、ハ、也、一、也、夜、の、お、井、又
向、く、と、曉、さ、り、一、蓮、の、花
淋、一、と、色、を、思、ひ、く、も、あ、り、新
祀、雪、也、き、思、ひ、山、と、新、江

全

上州藤岡

松入智山志日柳う花是 芦改

淋一宵配て初やうんこ

鈴虫乃声久如ね後の月

馬士味頃戸未流り枯群し

全

全八幡山

花の白き川心何事ふく邑山

半勢月く何とらん墨線

紅葉も家もあまを秋の海

浪も水も秋敷くう吹き小

全

南蔵亭

橋小群け女飛鳥山 芦相

鳴也茶舟乃如新橋柱

夕影松へ招き着う

新し月流るま也也々音

全

南見庵

ま林、其す春の河く 芦寛

草木の葉素思きも異ト

秋きて鳴きも縄ちきり危

かきうらうらぬれも音も響く

全

お世話と見せられおどろけり 魚千

暑くわくわくや夏の峰

虫の音もなき静かな月夜に

雪の日は晴れ移る日も一合

全

砂いしとまはれ忘れ梅の春 貞玉

橋へ尻はさきある田舎の

お前の聲とまじり別れに

お前や恋のこゝろにまじり

矢田 貞鶴

一ツ家の

あゝ

ふりかへる

枯野に

笠翁画



井ノ口丁 五

負、

五ノ下

卷下

白布

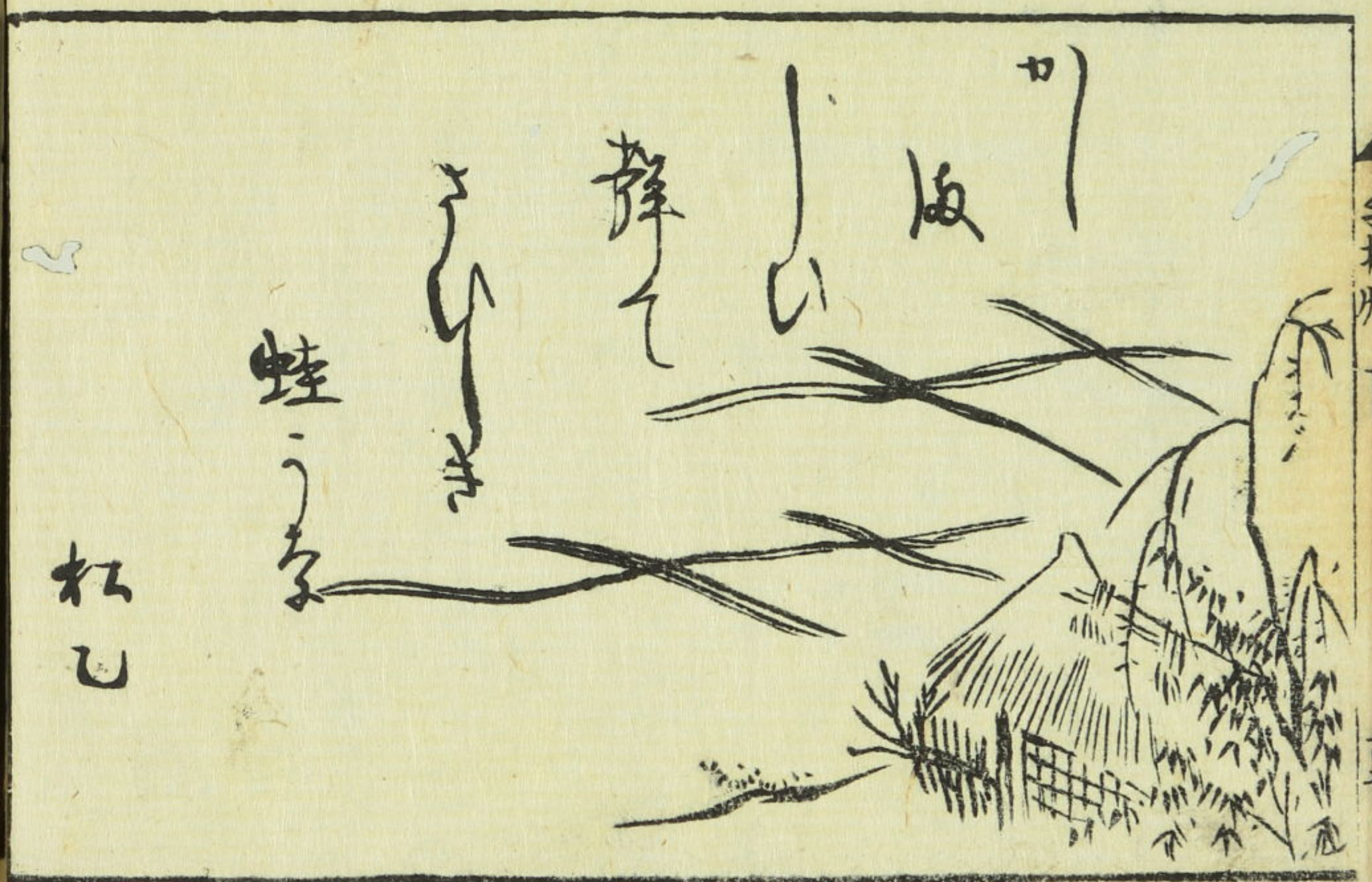


巴雲圖

白
子
子
子

牡字

卷八



蛙うな
 静い
 波
 紅し

三物

青くもみぢきと詠ふ紅葉し 貞里

入日ハ山月ハ海邊ニ

若君の新声ハ夢に憶梓

全

いささめくもみぢき行打戸 一祖堂 芦長

時分はるる鞠のころは

夜と昼へ継ぎつた時分

全

秋風きこえぬ夜あり杜鵑波光

麻酒ハ癖ハ成て疎い

水園の月ハ君子法と常と

全

可なり橋をたて後志月貞竹

新酒の破乃顔と云を

一紙のし海をよみ山是なり

全

上列幡山

むりもく會生にほる麦畑桐船

詩と評を余欲は煩枝

水と日と桑人の心と知るなり

全

限なりし淋しや庭に松花

垣のともや平かむ夕顔

琴の曲もそなり思ふ客のそ天

全

半斗下たるぬき枕を酒芋雁

初巻贈新井かいて全

昔のききし留めしききなり

全

山あのはらわたりや新巻月弘山

新巻もる月た新巻も

名義の秋は住居とゆふき

全

夢野に曲の跡をたぬき

はんとしき軒をたぬき

月と詩詠向端のそきき

全

全并

二入来てむう、飲ぬ新茶、桐葉

梅、梅、梅、梅、梅、梅、梅、梅

て、之、之、之、之、之、之、之、之

全

随平

ゆきや、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪、雪

松閣

窓、窓、窓、窓、窓、窓、窓、窓

沖、沖、沖、沖、沖、沖、沖、沖

全

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

機、機、機、機、機、機、機、機

名、名、名、名、名、名、名、名

う、う、う、う、う、う、う、う

水、水、水、水、水、水、水、水

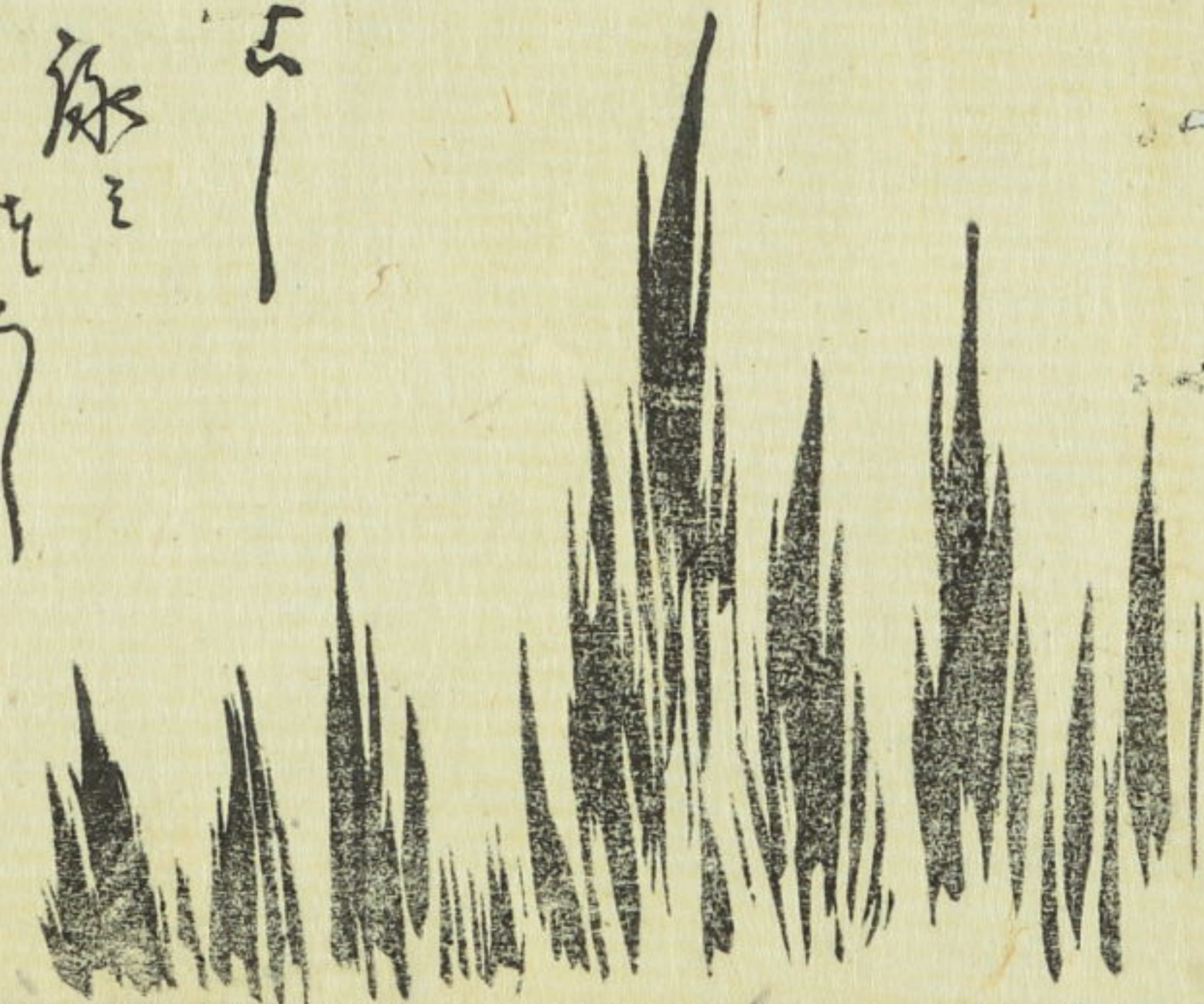
い、い、い、い、い、い、い、い

金

い、い、い、い、い、い、い、い

八、八、八、八、八、八、八、八

折、折、折、折、折、折、折、折



三才火丁

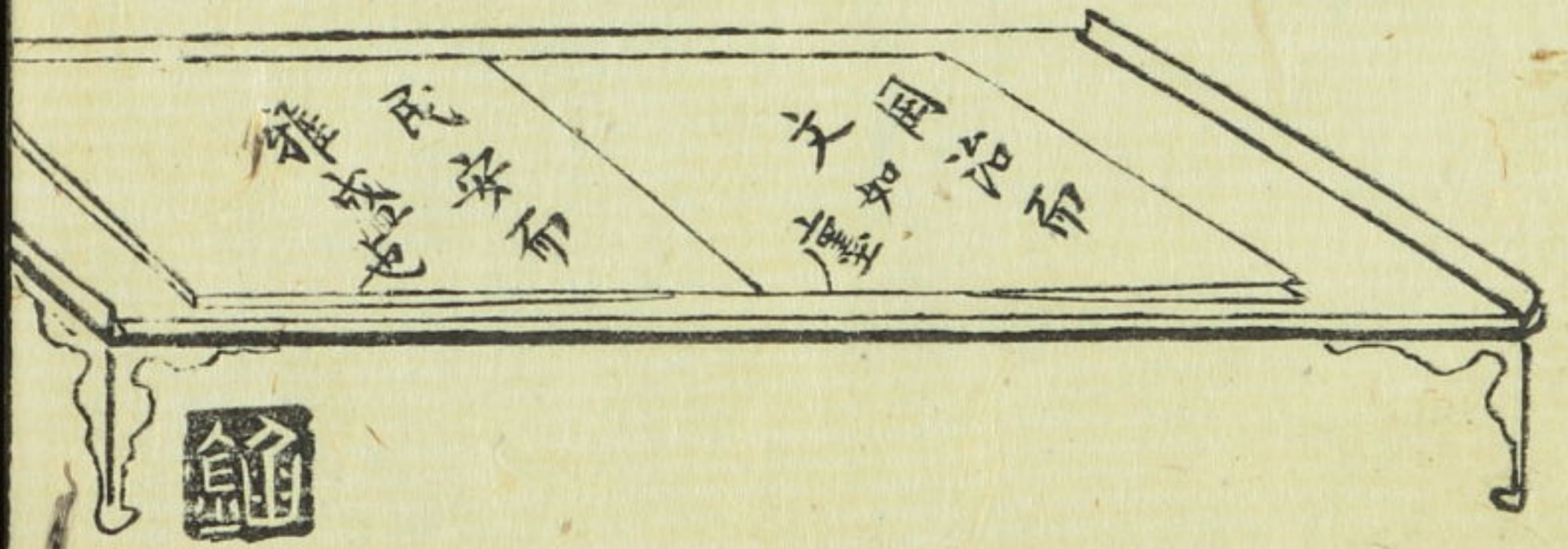
子以立石
寅月

いやーの

量公

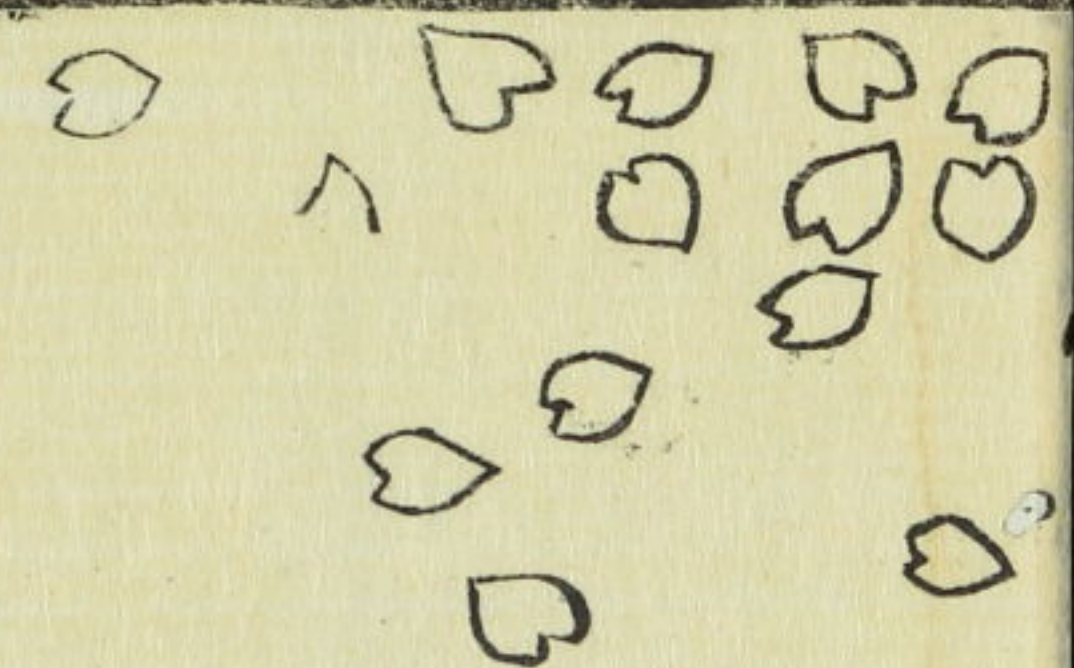
いさ

時代



鯨

再賢
鯨

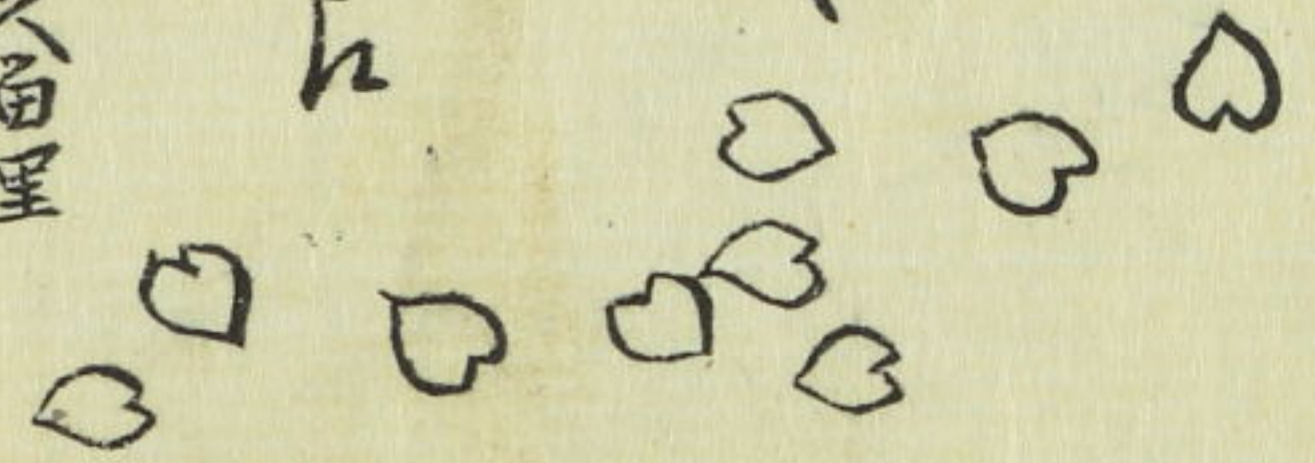


八九町

産座後光也

いさ
のい

上落久留里
新石



手遊丁下

九一

一谷

夕日

あま

し

八幡山
湖嶺



歌僊

風志

是源也

藤人長生の角に他帳貞山

常仙

有佐

自屋

執筆

山

志

月の名女土地の風有る志
味りあり子蟬を驚かし
春醒るゝ風の標一葉を
人し替ふゝ不即簡袖を
我儘も是道より老なり
以て身月京法轉る下範
其の居る所と云ふ花の
辨るゝ
去る乃瀧水の
屋

奇仙

二ツ三ツと熱味の村に友里
秋冬半々暖乃雲菅
歌を歌ふ友と隣の家
陰陽の村の子を貞国
其歌月を以て月を
其乃斗粒歌ふ
振向く忠盛敵へ能通
女乃其の涙の指し

日拭天窓へ雲十丈を
以拂拭尻乃牛ふり
この時人となふは
料と云ふは氣者
母親の氣は
意と云ふは
心と云ふは
月夜の
底の

孝養の
土蔵町へ
は
是月
誰かの
波面
多岐
何
此
五

手紙
丁
五

祠の事し廻てなるも響出たる
面の手破矢の葉のしほりなる
貴料食のむせくを様わや蜀
きとくをくあか幅幅る色
おの紙燈の灯乃新涼なる
酒の細い庵庵の神若友
おききりの恨の伊勢曆其色
ゆきや
は
道と
わらわら

奇仙

水仙の又夢が片葉抄に 徳
料理乃ゆきゆゆと興味なる
かゝる雨景所へ持込て 全
角力と習ふ小細市の意地一治
ふはるに涙をうすき月、
時分の候乃柳量るなり 若
色もまたなる小竜向ふ
溝はく除けはる魂一治

やんまりや赤あまの口車

虱目こく油油の後者 蒸新

なまよりあまむむむむむ

なまよりあまむむむむむ

おえうーいんやあまの在

春しやくろろろろろろろ

後家やの底と作の百とろ

釈あまの卦子入いん一

深幽乃草勢は出る峰の夕

秋もろろろろろろろろろ

聖玉の封疆て踊る西の海む

忽くや顔の道具くろろ一

河井のびーろろろろろろ

張藻を城も飽る卑雨 若冠

座んいんあまの風とちちち

星乃ききききききききき

世渡のふんがらと唄念佛

確據ふ京乃末摘

活きく一陽入とちち染 若冠

昔も歌やあまに話とむ

月雪亦懐きこゝ人明く生ゝ
 園煙素殿向く風の煙螢一泊
 木よき泣き悔る梓弓
 時心もたぬに園雨
 しの別とけ思ひおもふ倉倉
 去る陣一知れぬふが一夜
 秋くふ七つ下りおるの山燕
 琴柏 果鳥
 くとく
 うと

歌仙

上州藤岡連

松の色青きうつら月負川
 跡も清く等なる雁負賀
 玉姫清原の肩も保ちまふ負陸
 舟戸也沙のさへ所へ負隣
 けさ夢を女興乃出の都や負宿
 綿と喚く通をむく大西湖
 陽日すり合筆はさけり負笠
 舟の煙津橋へ漕ぐ湖雲

舟の煙津橋へ漕ぐ湖雲
 舟の煙津橋へ漕ぐ湖雲

借生補をくち料理をくち芦波
味い多はく封切に芦波
物味く流津ゆふ秋多据湖遊
あつくあひつて立山琇
揚先月陳皮はく月陳霍山
破く心ばく人の大名東川
る好の増添とあて書是に且山
日ハ多ふと泊備金周賀
浦風ふるあまの事也書 芦々
海の中うへ言はる 文里

余
去月一板振るをあて 芦波
肥之百ハ母乃秋之 芦波
絶おふ形も猫とつれ 湖々
あまの月道一松有 芦波
市やふとあて 芦波 西 西 西
あまの月道一松有 芦波
也神の末路あまの月道 芦波
後者浮きあて 芦波
居る二階へはあまの月道 芦波
あまの月道一松有 芦波

何處亦清くちる月夜 年月明く
 清き梅の咲く梅子木 水花
 折れし雨乾く高砂子 山崎
 袖子亦神代の錦 南無 若々
 下と見え三橋の 水も 文子
 尋ね家を思ふ 高砂子
 へん牛も 紫け市の花 髪
 黄雨が 雲生
 月夜 梅子
 月夜

哥 僊

夜とて亦清くちる月夜 年月明く
 梅子亦神代の錦 南無 若々
 下と見え三橋の 水も 文子
 尋ね家を思ふ 高砂子
 へん牛も 紫け市の花 髪
 黄雨が 雲生
 月夜 梅子
 月夜

別ふと云ふ内も春は久松島
唄じく町も雨ぐくみ里霍
能道余木履と云ふ自慢琴山
走らるる袖のほひ洲柳
おくく口紙もる月香松仙
虫指ふかく虫と怖る好知
以秋と告る平戸の娘が城守と
松山湯治のやうに入桐敷
を壁元南ぼくへ連出たり
おく是日は雪の声物草

七人の大木破の来る春の香松山
おと歌松乃顔へなりと松島
忠すてふ豊後くらの自強を測拵
さ何くも枕ぐくきて横瀬の
一間は涼くさ波も来入り
何と云ふは春の香松山
瀧奈と涌くた波おのき夕
夕暮にすおの井の湯をてり
お木清月くめるの音桐翠
うみぎの湯が熱い口里

珠の来て結きけ言知いふ雲
 ものと思へど知らぬ形
 糸念うやうに滑離れ相愛
 伊勢路へ入るまで及柳に盡
 九条赤藤と披肩くも立洲柳
 岬より波返来と文と松山
 是夜月花の何れも分松山
 佐保姫
 配利渡須
 短冊

歌仙

白雲の廻るまゝと名取
 鶴乃すくむ水香の香蘆翁
 吹く波や水相識も月も出づ
 清もゆゑに掛か船唄 貞國
 雲霞洗ひやうもはらうと 貞雨
 屋根骨入のくく 貞玉
 杉柱は其後の雨ぞ佛うら 貞翁
 赤子はいそぐとと 貞翁

大倉の通ふ跡より市 爲
千兩箱の捧く屋さく 爲
朝暮月夜終はるむ 爲
河津あふむ方殺林 爲
来る道の運者う 爲
二階在浦へ上り 爲
夫さあむれ者も 爲
口と吸きく事とい 爲
味さうに馬の 爲
やい半は 爲

切て太松書も 爲
舞白く 爲
うう園女 爲
娘の毛 爲
うは酒 爲
乞食 爲
十分 爲
聚 爲
玉姓の 爲
取揚婆 爲

宴舞の是代あらにけり
外喚く存記の通東金
早乙女の一人にける
他とあらず上る神鳴
檀子の葉にけり寺の
やあさひ日ハ海の名斗
亦とと二友、後の國
春月
登麻
まふ

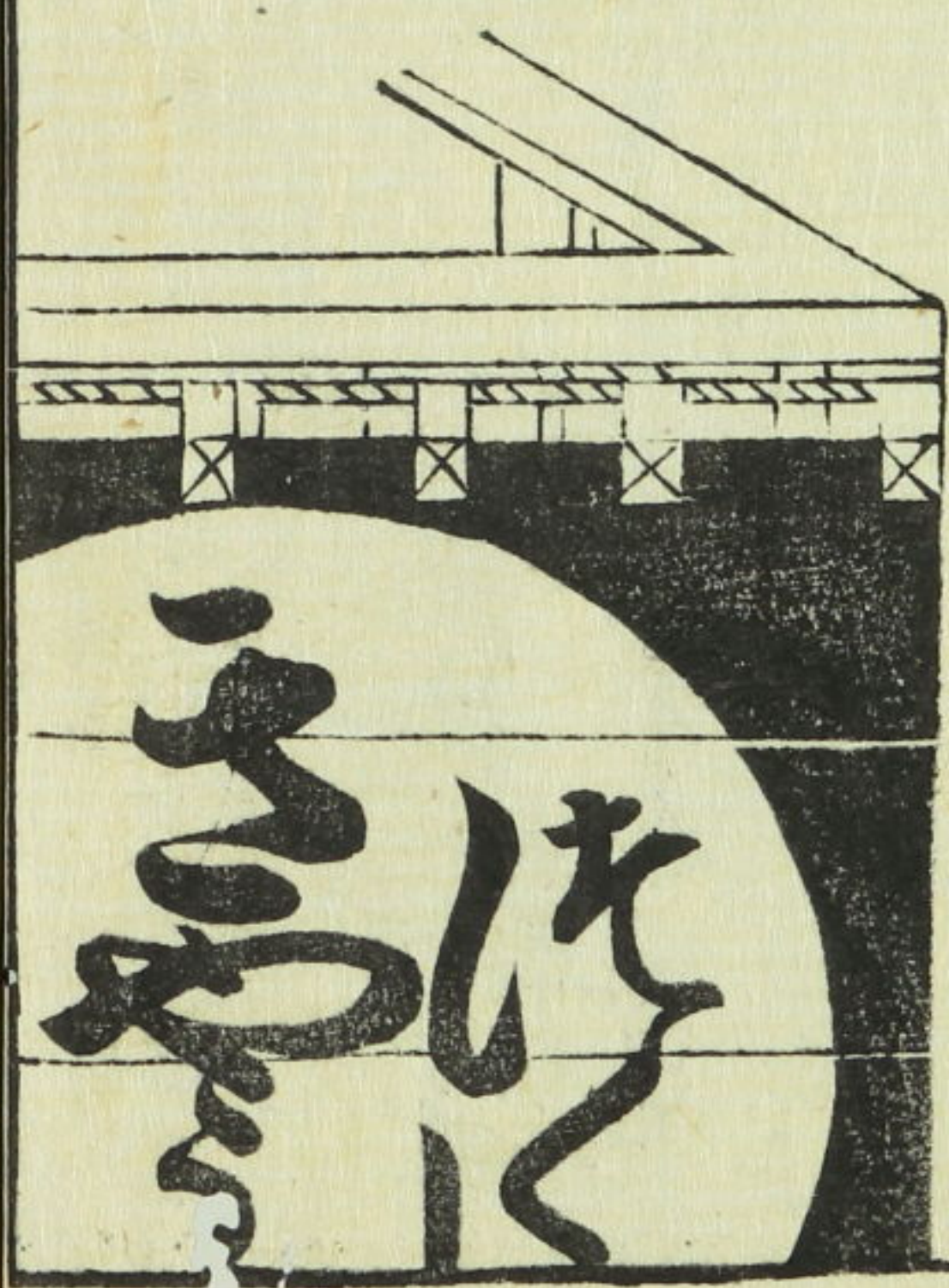


顔乙海也

後天ノ家

水ノ味

蓬山
寺小石



をふいと

白鳥

如來

花の香



日野金井
松声



手帳訂正

土月めく

経風と云ふ

飯日お祭

中ノ糸
山魁



土月めく

清く鳴るゝ如様のかりき木春

玉燈乃地ハ藤。川 将 又耕

生燭の酒堂にハハはる子 貞里

塔にけり墨汚き 禪 才玄

と糸系ある上と月見窓 文耕

糸引る糸月換の横さ 欠里

煉風吹小背も婦の星 文耕

ゆえにいふれぬ火の心根 欠里

の路乃と云は銀小判 才玄

瘧疾おけく半町も息 文耕
 ぬきく近きやうに杜鰲 只里
 寐所よりへて惺々も 本素
 今も音聲は走るはく 只里
 うろたえてうろたへ入相 文耕
 母斗虚病とすゝ急ぎの喪 本素
 夜目も反怖ひ首無垢の袖 只里
 月新も夜来は後むし 本素
 慈恵抄 文耕
 柿川

半歌仙

氣力いふぬ眺也山は良 白菊
 尻びそるに若菜の上 虎翁
 庭作り大工も百千鳥 一
 経うつく強碑小亮 只里
 流れても月夜持のり 只里
 雨も川雪とがう 只里
 流るの登るも 只里
 けちみいも 只里
 走るの皮靴は 只里

里見崩きけ拂物也。若氣
市邊野喧嘩乃中ふ斗、疾
昔生坊、奇異子人、
松杉も揺る月、浩然と
河崎吉院、清子合、
お渡、推を敵、蚊の、
よの女と、
音小物乃尾、
こみ川、
お、

半歌仙

熊笹も水まきなりぬる月雨、若泰
智とまき、
ある日、市の、
無端、
三月、
相扶乃喧嘩、
滅、
人、
人、

1

家

1

集

卷之六

斗奇仙

虎山

庚山

舟

錦山

墮

食

4

庚

多

死日の中目掃別、高き身
居風浪車亦空て冬来り春
朽て去る人も空に月影あふ
穢人の地獄もまじき處に山
すつちとぬきう、うき山
伴にうき世をわたりて
いふ終生浦へ渡りて格別
慈悲師去りて空のまじき
あゝしき

潜龍山門

半歌僊

源氏の膝を愛し如杜る圓山
硝鏡も破れし乃出予負山
別刀、破れしをくく、吸付天負賀
掃除仕業へく、深き言挑里
冬圓月に障子もきく、虎山
指股結く同中、空り負雨
神居や秋のこり、秋の空り
年うゝ年へ、館の有人、円山
も、のて、障子もきく、女も連て、挑り

何事も知らずの世に松
花も春の酒は有馬山
双河海を渡る舟
又相ふるの酒はたき
山と松の月を月
鴻の夢を海を月を
むとく月を月を
若くは月を月を
垣表南
いじふ系地
山

半哥仙

花を今世の酒は松
新海より松の酒は
帆を松の酒は松
家の中へ松の酒は
すうと松の酒は松
月を松の酒は松
連て松の酒は松
松の酒は松の酒は
松の酒は松の酒は

折角切つて如く又添ふ花
 獨りある秋の神々しく
 悠々食ひ花柳と云ふ松
 中へ是る富士の隅の青さるる
 養と違ふく月と直に 若氣
 丹戸城の水邊の草花のあ
 知えのふきや忠に飲食 常松
 舟車へ一枝の草花の山 若松
 へはとも 福壽乃
 終結
 する事

半歌仙

夕阿改

徳無、暮の面へ丸雪に 米成
 う、踏ふく松の風
 樓乃酒くほへ舌あき
 左刀持のふく脂さる
 ひとりまへ花月の際
 分れ牡丹を昔のの
 遊ゆふ花月さるや後居
 何と出りし舟中
 粒珠の散布が同打鉄

酒神が若く酒を
味ふ新む夢葉の玉
言ひ夢を成くゆらん
木陳江戸家の幕と打
る玉、わて、金沢の道
送る腰に披く涼む月
味香の焚や、賑や事
巻舞は帳の向ふり景
争ひ白くして
通る猿父入

津島山

林氏

百姓の夕飯、内月見、素勇
其のうねのうね子持重
子持うれ十分糸帆とて
唯心を好くく大抱
雪丸の三姉の紋張頼る
柳も玉糸糸糸の事目
深島の内へ冬、時節も
乳母糸糸のも岩橋の巻
喉の脛、是ぞ、腕の積

松原氏
廿二
城守新ふゆふと

東水とサシう瀧小雨の内

ふふ耳の石町の清

池廻小剣と書く欠ふの

唐松風小味方結やう

海島と余ふとをいかに

為と望別る地美入ふの

ふふふふふふふふふふ

小袖

道

署

署

斗哥仙

松原氏

貞州

初居の雲月濁新也鳩の池

月夜に松く

此のうに流る青ふゆふ

かふむくを蘇えむ

お九十八町乃峰の雪

鹽平すしふるの美外

じき持てふ柏を夕風

うんて通ふ路の煙火

海目と夜かきふくす

八島ハ星落月寒く立の
空平公法庵の和香
沖乃とやへるもの松を地
琴の文うまうるの
ぬき毛は枝と蟻初蟻
子へ下れ浅草生の霜
華と旭も其鞘支る危
貞屋
袖那 相識 貞山
菱のくち

半歌仙

上州小幡

寄江崎より来る秋寒江 芦門
底とくくは難決文り 貞山
向手押替くも松新ん 貞洲
山と誠なく沖き所は 若門
そらとまも守るふ月 秋空
とめく縁へ近き嵐入 丹雪
大岡表脊中鼓るく島何 若門
人生七十てきく 附
何となくおもひはるき 貞一

小舟の櫓子に花なりけり
 中龍車に持て参るは縁と抱
 面影に粉候は言何の口癖
 法師の妻はすべし松の香
 つるつる山の若菜夜お
 一振り有るはとよのとつる
 思ふととて入るは破碇
 桶のぢらゝも神は振合
 受男 松を
 りゝゝゝゝゝ

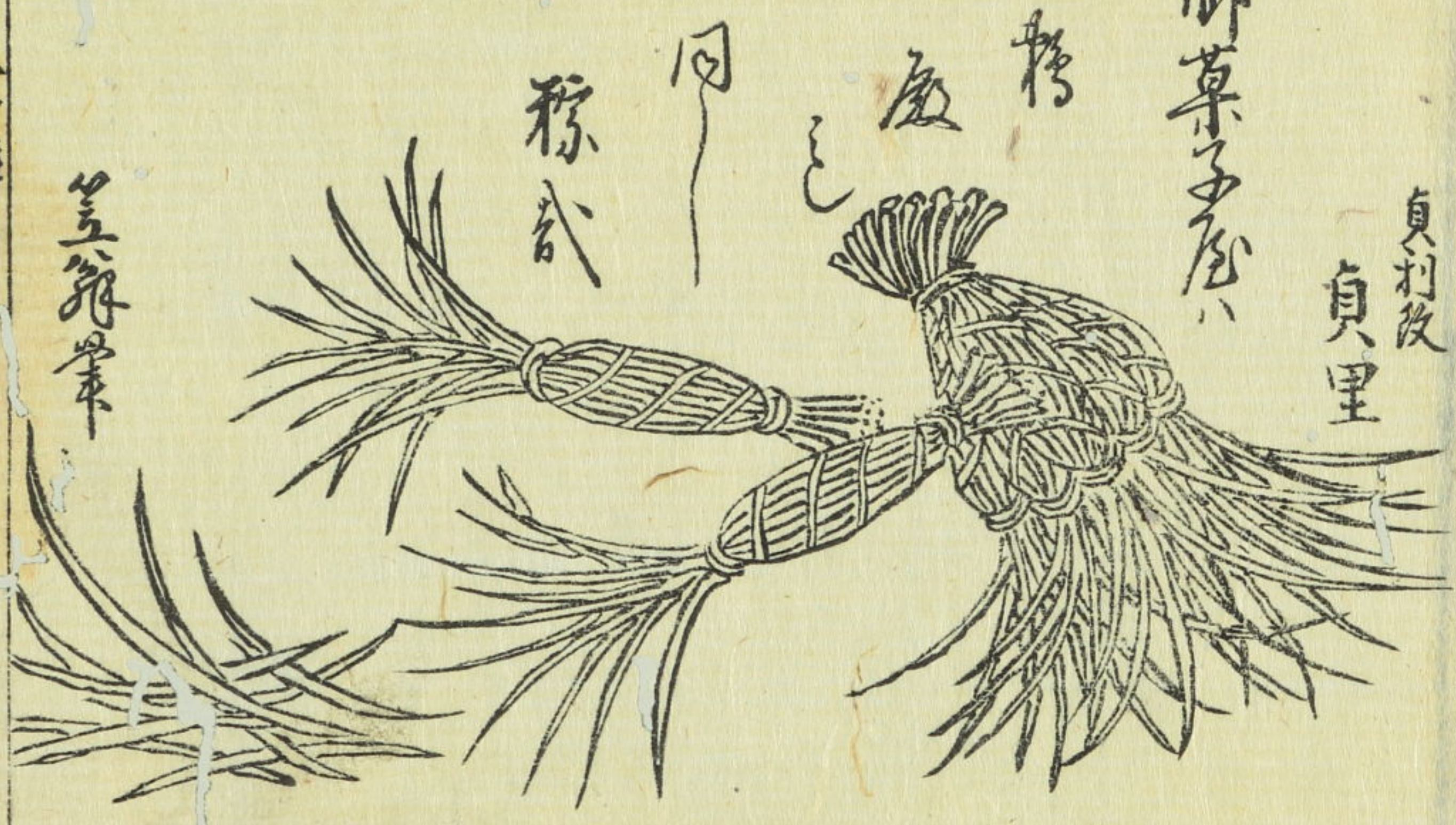
半歌仙

上野山名
 菊水堂連

深し泊るは移りぬる 芦橋
 是れはうたの羅母泥龜 菊要
 引けりとも成る帆の是へ 水荷
 桑と入るゝ下はつと 水巴
 二三里はもまふのぬき月夜 水延
 花は去る金と野のちふ出来 水龜
 大門と南へは秋の宿中へ 菊龍
 酒乃るゝに口舌ふも 水羽
 恨と反り切れてはさへり 菊山

井の森とある新記傍々何
 様入成起さう、格普請、此
 行とく、後、松、油、子、掌、要
 望、入、着、親、の、口、は、露、居、こ、戸、格
 ぶんやうと又と、い、重、さ、の、色
 續、帯、こ、ま、な、か、ず、も、取、込、こ、以、垂
 知、る、へ、考、妻、け、名、主、相、伴、兼、務
 花、の、菊、花、は、つ、て、掛、道、月、清、名、取
 山、閑、山、

貞利改
 貞里
 御菓子屋、



美奈

上野市住

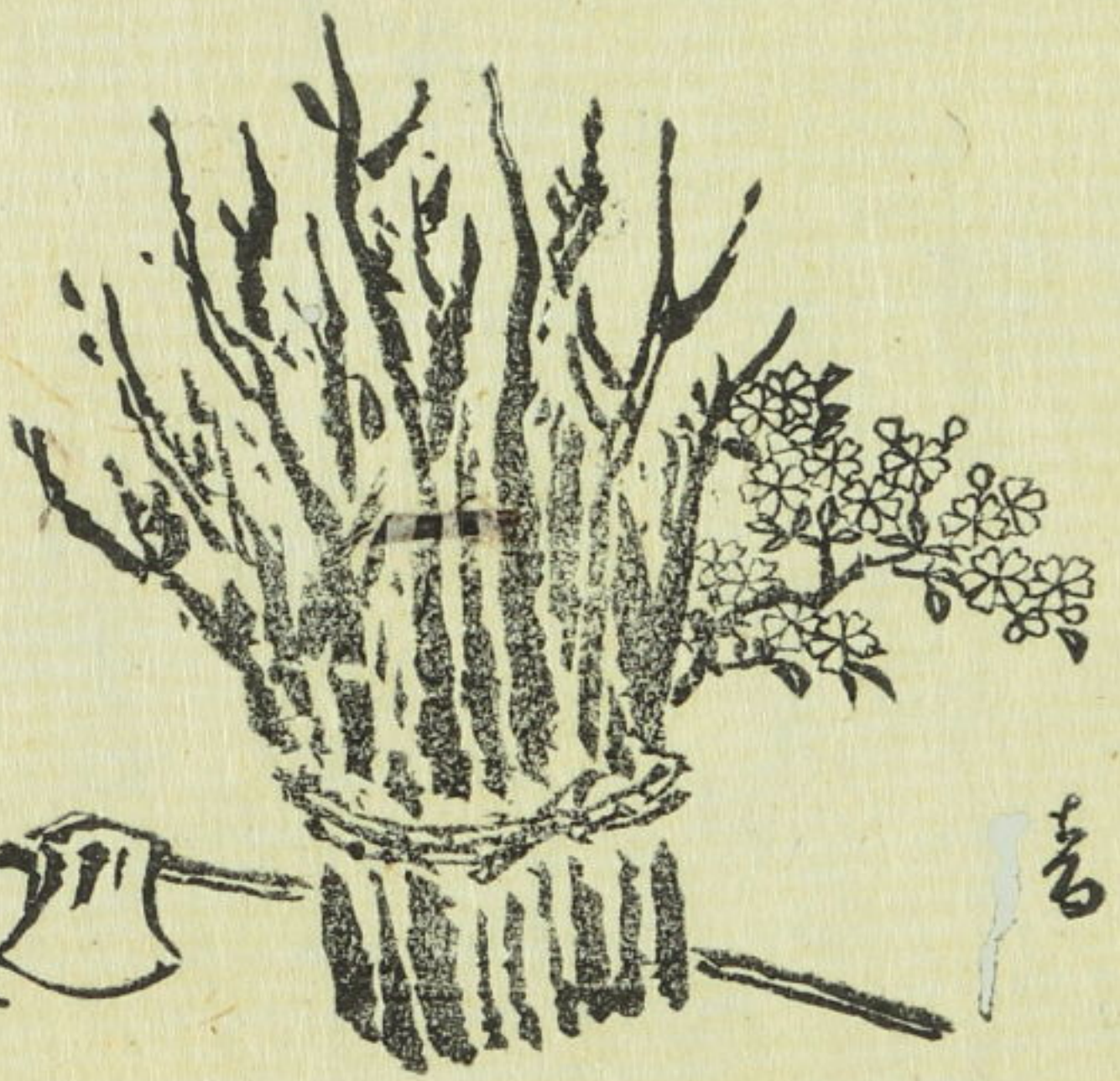
松月

入おとふし

花

斧の

香



休真美

牛幸の

牛

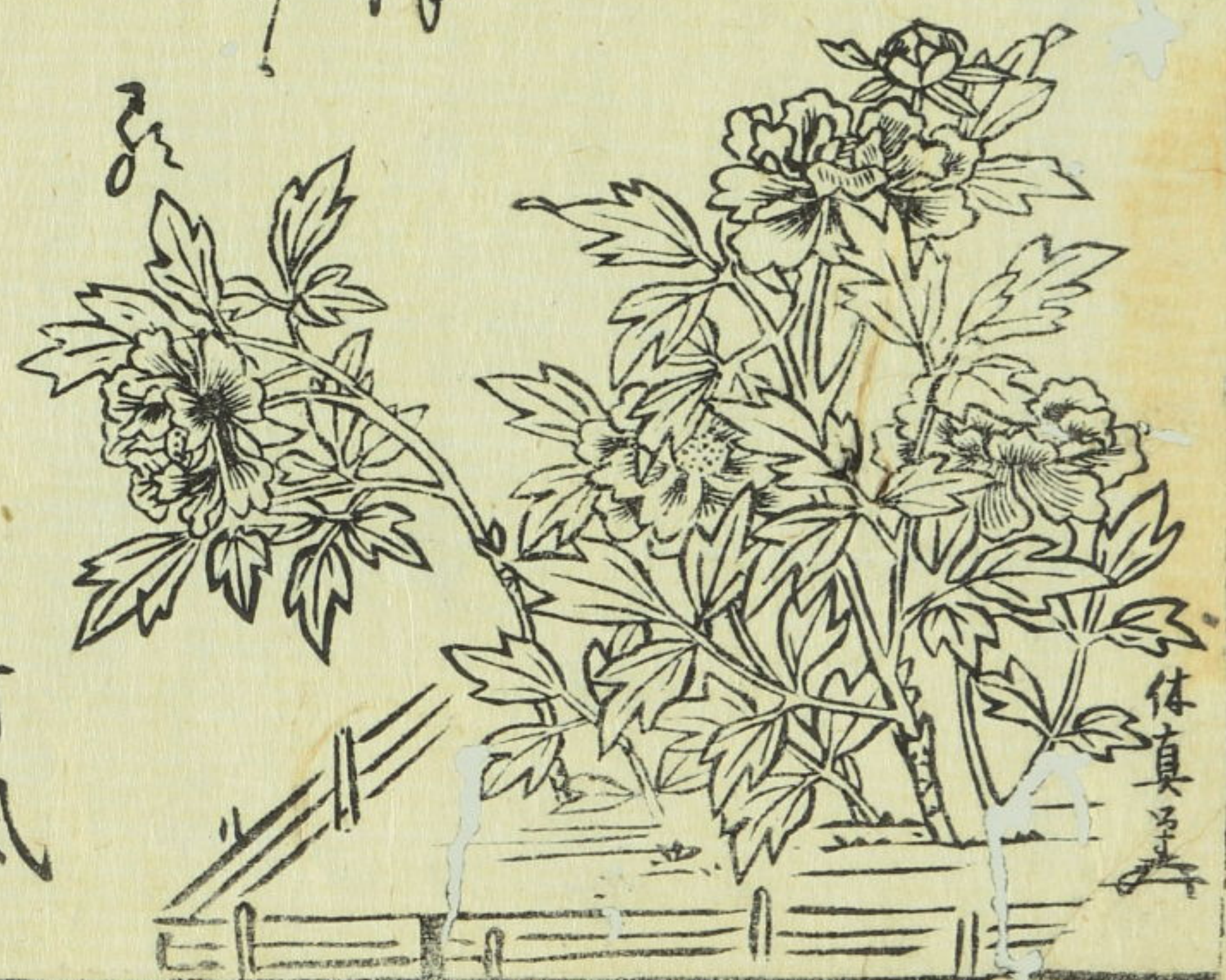
心

清水

扇山



休真美



休真堂

元
通

紅牡丹

可風

首尾

三十本

接吻枕淋しぬ露夜半臥牛
 寒き朝顔の戸茅葺
 酒の通等紅おふり天
 光ふり世海に世の會わす
 胸の眉もえり世の帽も遠
 世の人の心もえり世の
 本男の心もえり世の
 世の人の心もえり世の
 世の人の心もえり世の
 世の人の心もえり世の

心水の奥も懸く巻こく、
船も船と伸きまうる舟生

裏白

新龍も目を度自と
いひく

滋柿香

舞の富貴やむさうあ海 貞主
情恰如国の如く、只の如く
海を渡る月、靡か能きわく 貞屋
遠き遠きわく、跡附湖船
石や古現の跡も理屈は 芳翁
こゝろ風、物命なりふ、と
先陣、破る後陣、入る、湖紅
ふ代、あ代、較乃蒲、海、と

表白

東氏

星移り琴三絃も、夢醒る 徳山
後、いさかき、辯天
茶地、主、大事の父と、拾うて
猫、乃、存、存、存、存、存、存
世、又、存、存、存、存、存、存
世、存、存、存、存、存、存
松、存、存、存、存、存、存
為、存、存、存、存、存、存
大、存、存、存、存、存、存

少々の時鴨は食ふ
田舎の路を旅
如佐大八のまゝ
一古く半町斗
谷津橋も西合乃内

四季

星川
平井の霞もむき箱根山貞至
有るは抜くはうの峰
最響や相池の夜の庭
と食う先細い小坂南

六

以座の雲は心也大根貞賛
湖棠の欠綿分梨うぢ
死と一似事なると梅屋
仲也入江の二枝は鴨

洗ひ髪もくはる枯井も

常に入参利く和者貞屋
鶴は己うまは橋柱

題 琴の曲

ふくろふに義に披る常山

井の巻 井の巻

易く永に井の巻に義に披る

撫琴の巻に義に披る

琴の巻に義に披る

又易く永に井の巻に義に披る

提筆の十二の巻に義に披る

水心所の巻に義に披る

奉納

鼻の巻に義に披る

今年桃の花

いふくは、巻の丁巻

巻の丁巻、巻の丁巻

集の巻、巻の巻

提筆の巻、巻の巻

法抄の巻、巻の巻

或は巻の巻、巻の巻

花よりさきさき
紫の枝の葉より千枝
社よりあふれぬ花
鬼の花よりさきさき
さきさき花よりさき
知れぬ花のさき
新花の初花よりさき

乞へば花よりさき
花よりさき花より
花よりさき花より
花よりさき花より
花よりさき花より
花よりさき花より
花よりさき花より

手灯燈々々
若丸金の色ふ孝

相河洞より書

延享二年

し世桐秋



新央其傘与今手
挑灯者以便雨行
夜歩焉然則又憾
無合羽也後作書
而問足之則山答
云予為書也只童
孝傘雨灯暗而不
率於行路言也至
其合羽者各宜在
勉強矣予以爰贈
識謂孝則在祿其

中兵有徐豈何患無
合羽也只勉強而得
骨誓則於此道無惡
略也

云

負賀跋



手挑灯下卷終

蘆翁藏板

